

「お前も、正直になれよ」  
——無口な花屋の幼馴染に  
温室で閉じ込められて、  
二十年分の蓋ごと  
暴かれて朝まで離しても  
見えません

指先が、花びらに触れるみたいに鎖骨をなぞった。

たったそれだけで膝の裏がじんと痺れて、温室のベンチに座っている身体が小さく震える。

ガラスの天井を叩く雨音。蘭の甘い匂い。三十度を超える湿気が肌に纏わりついて、濡れたブラウスの下で心臓がどくどく鳴っている。

——なんでこんなことになっているんだろう。

つい一時間前まで、私はただ花を買いに来た常連客だったのに。

「震えてる」

低い声が頭の上から降ってきた。

花屋「柊」の店主、柊郁人。無愛想で、愛想笑いのひとつもできなくて、「いらっしゃい」すら言わない人。なのにその指だけが——花に触れる時と同じ丁寧さで、私の肌をなぞっている。

「寒いのか」

「……ちがいます」

声がかすれた。寒いんじゃない。この人の指が怖いくらい優しく、逃げ場がなくて、震えてるだけ。

でもそんなこと言えるわけがない。

いつもみたいに「大丈夫です」って笑えばいい。そう思ったのに、唇が動かなかった。

さっきこの人に言われた一言が、まだ胸の奥に刺さったまま抜けない。

——お前も、正直になれよ。

\*

一時間前。金曜の午後六時半。

仕事帰りの私はいつも通り、駅前の花屋「柊」の引き戸を開けた。からん、と古い真鍮の鈴が鳴る。

壁一面の棚に切り花と鉢植え。土と水と緑の匂い。カウンターの奥で店主がバラの棘を処理している。私が入っても顔を上げない。半年間、ずっとそう。

それが嫌いじゃなかった。ここでは愛想笑いをしなくていい。「お疲れさまです」と言わなくていい。花を選んで、お金を払って、それだけ。

一週間で唯一、自分のためだけに使う三十分。

今日はダリアの深い赤紫を二本と、白のトルコキキョウを三本。カウンターに持っていくと、店主が無言で受け取り、茎の切り口を斜めに落とし直した。

太い指なのに、刃物を扱う手つきが正確で繊細で、見るたびに目が吸い寄せられる。大きな手。ゴツゴツした関節。なのに花びらを傷つけない。

包み終わった花束を受け取ろうとして、気づいた。頼んでいない花が一輪、混じっている。白くて小さな——クローバーの花。

「……これ、頼んでないですけど」

「サービス」

それだけ言って、視線をバラに戻す。

胸が、きゅっと鳴った。三ヶ月前、入荷したクローバーの鉢に触れて無意識に呟いたのだ。「この花、好き……昔、花冠を作ってもらったことがあって」と。それだけ。それだけなのに、この人は覚えていた。

ありがとうございます、と小さく言って店を出た。

外は蒸し暑くて、空が暗くて、遠くで雷が唸っていた。

——そして、豪雨。

傘を持っていなかった。花束を庇いながら走って、でもブラウスは一瞬でびしょ濡れになって、結局引き返した。花屋の灯りがまだ点いていた。

ドアを開けると、閉店作業中の店主が私を見て一瞬だけ目を見開いた。すぐに戻ったけど。

「タオル」

カウンターの奥からタオルが飛んできた。それだけ。髪を拭いている間も何も言わない。

「すみません、雨が止むまで——」

「裏の温室にいろ。ここより暖かい」

裏口から繋がるガラス張りの温室。蘭、アンスリウム、極楽鳥花。熱帯の花たちが並ぶ空間に足を踏み入れた途端、むわりと湿気が全身を包んだ。

ガラス天井を雨が叩く低い音。三十度近い温度と、八十パーセントを超える湿度。ブラウスが肌に張り付いて、スカートの裏側まで湿っている。

ガチャン。

金属音。

振り返ると、温室の扉の自動ロックが落ちていた。

「……鍵が内側から開かねえ。築五十年の温室だ、ロックが錆びてる」

花に水をやりに来た店主が、舌打ちをした。

「……直せないんですか」

「朝にならねえと業者呼べねえ」

朝まで。この人と。二人きりで。

心臓が跳ねた。温室の隅のベンチに座って、花束を抱きしめるように膝に乗せた。

しばらく沈黙が続いた。店主は黙々と花の世話をしている。萎れかけた蘭に霧吹きをかけ、葉の裏を確認し、支柱の角度を直す。

——その手を、見ていた。

太い指なのに、花びらに触れる瞬間だけ別人みたいに繊細になる。あの大きな手が蘭の花弁をそっと持ち上げて、裏側の水滴を払う。喉が、かすかに鳴った。

目が離せない。暗い温室の中で、花に触れるこの人の手だけが、やけにはっきり見えた。

「……花が好きなんですね」

沈黙に耐えきれなくて口を開いた。

「好きっていうか」

店主が霧吹きを置いた。初めて、こちらを向いた。

「花は正直だ。水が欲しい時は萎れるし、光が足りなきゃ伸びる。根腐れしたら葉が変色する。全部、身体で言う。嘘をつかない」

——この人がこんなに長く喋るのを、初めて聞いた。

「人間のほうがよっぽど厄介だ。平気な顔して枯れかけてるやつがいる」

視線が私を射抜いた。

「毎週金曜、仕事帰りに花を買いに来るOLが一人いる。いつも笑ってる。いつも『大丈夫です』って言う。——でも、花の選び方が毎週変わる」

指が、膝の上の花束を握りしめた。

「元気な時は暖色を選ぶ。落ちてる時は白い花ばかり買う。先月、三週連続で白だった。今週やっと赤が入った。——お前、先月何があった」

息が、止まった。

——見られていた。半年間。花の色で。私の精神状態が。この人に。

自分でも気づいていなかった。白い花ばかり選んでいたこと。先月、上司に理不尽な叱責を受けて、残業が続いて、眠れない夜が増えて。でも「大丈夫です」と笑って、誰にも言わなかった。

花だけが知っていた。そしてこの人が——花を通して、読んでいた。

「……別に、何も」

「嘘だ」

萎れかけた蘭に霧吹きをかけながら、こちらを見ずに言った。

「——お前も、正直になれよ」

胸の奥で何かが、ぱきん、と音を立てた。

\*

急に、息が苦しくなった。

温室の湿気のせいじゃない。胸の奥が軋んでいる。二十年かけて積み上げた蓋に、ヒビが入った音がした。

長い沈黙。

雨音だけが降り続けている。

膝の上の花束に視線を落とす。クローバーの白い花が、湿気で少しだけしなだれていた。

「……正直になんて、なれないですよ」

声が震えていた。自分でも驚くほど。

「私、ずっと……大丈夫って言ってないと、壊れそうだったから。七歳の時に母がいなくなって、父を心配させちゃいけないって思っ

て、それからずっと……泣いちゃいけない、弱いところ見せちゃいけない、欲しいって言っちゃいけないって……」

温室の中に私の震えた呼吸と雨音だけが残った。店主は何も言わない。霧吹きを持ったまま、微動だにしない。視線だけがこちらに向いている。

五秒。十秒。

目から、涙が落ちた。

「……泣いてる。私、泣いてる……やだ、すみません、何で——」

慌てて涙を拭おうとした。大丈夫です、すみません、こんなの——

手首を、掴まれた。

大きな手。花を扱う時と同じ力加減。強くない。でも逃がさない。

「……拭くな」

目を見開いた。

「萎れてる花から水を取り上げるやつがあるか」

——涙が、止まらなくなった。

声を殺して泣いた。二十年分の。誰の前でも見せなかった涙を、この無愛想な花屋の前で、止められない。

店主は何も言わなかった。手首を握ったまま、黙って待っていた。

どれくらい泣いたかわからない。

泣き止んだ私の頬を、親指が滑った。涙を拭うんじゃない。濡れ

た頬の輪郭を、確かめるように辿る。花びらの水滴を払う時の、あの手つきと同じだった。

「水が欲しい時は、萎れていい」

低い声が至近距離で響く。いつの間にか、顔が近い。

手首を握っていた手が指先へ移動して、私の指を一本ずつ、ゆっくり開いていく。花束を握りしめていた力がほどかれる。手のひらが露わになった。

そこに、この人の手のひらが重なった。

大きさが、全然違う。温度も。この人の手は土と水を扱う人間の手で、硬くて、温かい。私の手は冷たい。

「……冷えてる」

私の手を、包んだ。

——この手を、知っている。

記憶の底から何かが浮上する。大きな手。花を編む手。シロツメクサの茎を器用に結んで、泣いている女の子の頭に花冠を載せてくれた——

「……いっくん？」

手が、一瞬だけ止まった。

まさか。この不愛想な花屋の店主が。あの日、公園で泣いていた私に花冠をくれた男の子。

「……気づくの遅えよ、りんちゃん」

声が、かすかに揺れた。不愛想なまま。でも「りんちゃん」の響きが、二十年前と同じだった。



「半年前。お前が初めてうちに来た日に分かった。クローバーの鉢に触って、指が震えてた」

——私が気づくより先に、この人が気づいていた。半年間、何も言わずに。毎週のクローバーは「覚えている」という合図だった。  
涙がまた溢れた。さっきとは違う涙。

「なんで……なんで言ってくれなかったんですか」  
「お前が正直になるまで待ってた」

二十年前と今が重なった。あの日、泣いていい場所をくれた男の子。二十年後に、泣いていい場所をまた作ってくれた人。変わったのは身体の大きさと声の低さだけで、手の温もりは同じ。

両手で頬を包まれた。大きな手が、顔の輪郭を覆い尽くす。

額に、唇が触れた。花びらに水滴が落ちるような、軽い接触。  
それだけなのに、背中に電流が走った。

——離そうとした。この人の手が。

「……もう泣き止んだか」

私を解放しようとする。

指が——自分でも信じられない速さで——この人のシャツを掴んでいた。

「……っ」

掴んでから、驚いている。何をしているのか。この手は。

「……離さないでください」

声がかすれている。自分の声じゃないみたいだ。

「二十年……ずっと、誰にも言えなかった。欲しいって言えなかった。でも」

シャツを握る手が震えている。白い指の関節が白くなるほど力を込めている。

「……欲しい」

一言。たった一言。二十七年間、封じてきた言葉。

この人の目が見開かれた。一瞬——一瞬だけ、不愛想な顔が崩れた。笑顔じゃない。泣き顔でもない。二十年待った言葉を聞いた男の、名前のつかない表情。

「——言えたじゃねえか」

顎を持ち上げられた。花の角度を変える時みたいに繊細に。でも拒否を許さない力で。

「もう一回言え」

「……え」

「花は一回じゃ足りねえ。何回でも水をやる。何回でも言え」

目が潤んだ。

「欲しい……あなたが、欲しい……っ」

唇を塞がれた。

深いキス。花の香りがする。舌が触れた瞬間、身体から力が抜けた。膝が崩れそうになるのを、腰に回された腕が支える。

「んっ……♡」